巻頭言

「ポストコロナ時代の高等教育」

中部大学の前身である中部工業大学時代の1979年に教育に関する資料を収集した『教育資料』が刊行されました。それを継承する形で2001年にこの『中部大学教育研究（Journal of Chubu University Education)』が創刊され、第21号の発刊を迎えることになりました。コロナ禍における視座から１編の特別寄稿、８編の実践研究・実践報告、１編の教育スケッチを編纂しました。

歴史を遡ると、人類に脅威をもたらした感染症は数多く挙げられます。人類が根絶した唯一の感染症である天然痘は、紀元前のエジプトのミイラにまでその痕跡が見られます。また、「黒死病」と呼ばれたペストは540年ごろにヨーロッパの中心都市であるビザンチウムで流行したとの史実があり、14世紀にも再びヨーロッパで大流行し、ヨーロッパだけで2500万人が死亡したと言われています。そして、比較的新しい1918年のスペイン風邪の大流行では世界で4000万人以上がその命を落としたと言われています。2019年に発見された新型コロナウイルス（Covid-19）は、全世界に拡大し、2021年12月までに感染が確認された人は２億７千万人、死者は533万人に上っています。

未曽有の有事となった新型コロナウイルス感染症の拡大は、それまでの社会を一変させ、テレワークやオンラインでの会議が常套化することとなりました。高等教育の現場にとってもそれは例外ではなく、オンラインでの授業を中心としたニューノーマルな大学教育が急速的に拡大し、大きなパラダイムシフトを迎えました。本学においても大学間での連携協定を締結するなどして、新たな教育システムの構築を模索しています。

2005年の中教審答申「我が国の高等教育の将来像」の「２．新時代の高等教育と社会」には、高等教育の役割として「人格の形成、能力の開発、知識の伝授（中略）様々な学習機会の中にあって、中核をなし、社会を先導していくものである」「19世紀ドイツ以来の『フンボルト的大学史観』は我が国の大学の在り方に大きな影響を与えてきたが、大学人を第一義的に研究者であると自己想定し、研究成果の披瀝が最高の教育とする考え方は、主としてエリートに対する教育を想定して成立するものであり、21世紀の今日では歴史的意義を有するに止まるのではないか」との記述があります。2021年第11期の中教審大学分科会においては、教育と研究の両輪だけでは不十分であり、第３の柱として、社会的実践が必要なのではないかという記載が見られます。新型コロナウイルスという外圧によって、日本の高等教育の在り方が問われる時代が到来したと言えます。教育の手段の多様化は受ける側の学生にとっても、準備をする教員にとっても、新たな試みであることは間違いありません。しかしながら、それらの教育における質的保証は普遍的であり、ゆるぎないものである必要があります。

コロナ禍における高等教育の新たなステージを考える一助として、この『中部大学教育研究』が大きな役割を果たすことができると信じています。

2021年12月

中部大学　学長
竹　内　芳　美